



巨大都市への対応 —個性ある多核都市の推進—

法政大学教授 田村 明 (会員)

数年前にアメリカ国務省で発表された「西暦2000年の地球」では、紀元2000年には世界最大の都市はメキシコシティで、3千万人を超えるだろうと言われ、びっくりしたものである。これまで大都市といえば、ロンドン、ニュー・ヨークなどというのが常識であったから、その観念を一変させた。

しかし、実はびっくりすることではない。我が国の首都圏は、東京を中心にした東京圏であり、南関東の1都3県で、既に人口は3千万人を超えている。東京圏はとっくに世界最大の都市になっていたのである。しかも、なお膨張を続けようとしている。

バックミンスター・フラーは、今日の1人当たり消費エネルギーをすべて人力によると計算すると、1950年代のアメリカで1人当たり153人の奴隷を使っている計算になるといふ。現在の日本でも1人当たり200人程度の奴隷を使っていることになろう。この計算でいくと、東京圏は古代都市とすれば3千万人の200倍で実に60億人の人口を収容していることになる。古代ローマも100万人とか150万人とかいたといわれるが、問題ではない。60億人といえば紀元2000年の地球の総人口にほぼ匹敵する。

このような巨大都市がそれなりに運営されているのは、世界から見てひとつの驚異である。だが、それだけに水、ゴミ処理、交通、住宅、土地、福祉などの問題は余りにも多い。

3千万人の都市圏を支えているのは、都心への鉄道網と、遠距離通勤である。東京のように郊外から都心への大量輸送機関が整備している所はまずない。だが、それは満員の往復通勤という一種の時間外労働によって支えられている。働き過ぎや労働時間の短縮をいう前に、まず遠距離満員通勤を解決しなければならないが、地価高騰はますます遠方への居住を余儀なくさせている。

私はかつて多核多心型首都構造を主張していたが、すでに首都圏構想として多核都市がうたわれている。情報手段の発達した今日、より積極的な機能分散型の個性のある核都市を実現し、核都市の間には豊かな水や緑がほしいものである。